

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7-8

「粋な計らいをしてくれたご両人に、心から感謝したい。嬉しいね、嬉しいだろう……」

全身を使って喜びを露わにしたTは、女優と男優を交互に見やっ、同意を促した。

バーも立て込んでいたので、バーテンダーの菜々緒に代わってマネージャーがシャンパンを手際よくサーブした。

三人の役者と一人の画家が一斉にフルート型シャンパングラスを合わせることで諍いの場面が転換したのを引き時だと見た真紀は、呼んできてもらったヒデコと入れ替わりに舞台の袖へ立ち去るように持ち場を離れた。

後を任されたヒデコが、男優の熱烈なファンにもかかわらず、それをおくびにも出さずにそつの無い接客をしていると、急に大御所俳優のTが口元をほころばせて立ち上がり、今しがた入店してきた女性客に近づいて丁寧な挨拶をしている。

『こはる』の客筋で年配の女性のごく稀だったのでヒデコが怪しんでいると、女優の眼の色が急に変わり、男優に目配せをした。

七十代の有名女優Kが花屋『フラワーベッド』の令子さんと一緒に来店した。

令子さんが『こはる』の営業時間に来たのは初めてだったし、更には大女優と連れ立ってなので、珍しく店内の空気がざわついているのが伝播してくる。

男優Tより八歳ほど年上の女優Kは、往年の名監督たちの作品に数多く出演していることもさることながら、現在は訳あって、長年住み慣れたパリと東京を行き来しつつ、主に小説やエッセイの文筆活動をしている。

来日した際は、定宿の帝国ホテルに滞在して仕事や雑用をこなした。

いつの間にか真紀も戻って、華麗を競うかの如く六人掛けの席が華やいでいる。中でも取り分けTが上機嫌ではしゃいでいる。

「Kさんとはシリーズ物でご一緒させていただいたことがあるんだよ。残念なことに、その作品一本だけなんだけどね！」とTはリズムカルに言って、Kをじっと見つめた。

老木に花の咲くように、独特な弓形の唇でKは小さく笑った。

「シャンパンのロゼを二本お願いします。私に奢らせてください」と男優が癖のあるハスキーな声で言った。

「さすがだね！」とTは目を細めて唱える。

「私からも同じブランデーを一本お願いいたします」と女優はゴールドブラウン色の口紅を塗った魅惑的な口元をほころばせて、男優に倣うように言った。